

# 多古の米 金賞受賞!!

平成25年、ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」。この和食の中で欠かすことができない米には、脳のエネルギー源となるブドウ糖のほか、ビタミンなどの栄養素が多く含まれ、スポーツ選手や医療に携わる方々、国も米食をすすめています。

その一方で、米を生産する側に目を向けてみると、価格の低迷・後継者不足といった問題が山積している実態があり、多古町においてもこの問題の深刻化が予想されます。

そんな中、昨年11月に国内最大規模の大会として青森県で開催された「第



寺田栄さん(船越)

16回 米・食味分析鑑定コンクール…国際大会」の早場米部門において多古の米が見事金賞に輝きました。  
今月号では、この米を出品した寺田栄さん(船越地区)に、今後の米づくりについて話をうかがいました。

## 自分の受賞がきつかけになればいい

受賞の感想と言えば、嬉しいという言葉ですね。

審査の方法は、食味計と味度計の値、実食による官能審査の結果により上位から何番目ということを選んでいくわけですが、8月中旬に稲刈りをして同月中に流通可能な米として、今年から新たに設けられた早場米部門において最終段階まで残ったということです。

今回出品したものは、そんなに特別な栽培方法をしたわけではありませぬ。多古の土壌そのものが美味しいお米を作るのに適していたということ、それをむやみにいじり過ぎなかったことが良かったのかなと思いますね。

たくさん収量を獲ろうと思わず、極力肥料をやらないこと。当然、何も加えないということではありませんが、栄養失調にならない程度にしてあげるというのが美味しいといわれる米になるようです。そういうことに気を付けたものを出品したわけです。

もちろん、みなさん自分が育てた米が美味しいという自負もあるだろうし、一生懸命取り組まれているわけですが、ただ口だけでうちの米は美味しいと言っているだけではだめなんじゃないかな。極端な話、全員がこういったコンクールに出品して、みんなで競っていけるようになれば自ずと品質も高くなるし、名前も知れ渡るようになると思います。また、コンクールで審査する食味鑑定士が業者の場合もありますから、そこから新たな販路が開拓できる可能性もありますね。

多古米グランプリも同じですが、自分の受賞が、もつと良い米を作ろうという全体意識の底上げになる一つのきっかけになればいいと思います。そして、多古米において第三者的な裏付けがあちこちから出てくるようになれば、一歩前に進むんじゃないかな。

この受賞を何らかの形でPRしたほうがいいとは思いますが、自分でも初めのことだから正直なところ、具体的なことはこれからです。行政として



全国各地からの出品数は4300点を超える

も上手く活用してもらえればいいと思います。

いろいろと難しい問題もありますから、今回の受賞がすぐ売上げに繋がるとは思いませんが、今年も受賞できるような米づくりに取り組んでいきたいとは思っています。

将来において多古の米づくりを絶やさないために、町としても品質や食味にこだわり米そのものの価値を高めていくこと、あるいは加工品等にするこゝとで違った付加価値を高めること、さらには、今回の受賞を機会に多古米をより広くPRしていくなど様々な取り組みを展開していきます。

## 多古の子 町の子 みんなの子 集会 『みんなで多古町の教育を考えよう』

多古高校が県のコミュニティスクールの指定を受けて3年目となる集大成の年を迎え、学校運営協議会では、地域として何ができるか思索していた矢先、夏に発表された募集定数の1学級削減。子どもの減少で多古高校への進学者数も少なくなってきたことも原因ですが、このままでは学校がなくなってしまうのではないかと危機感を感じ、改めて町に高校があること、教育について子どもから大人まで、みんなで一緒に考えてみようという実行委員会が組織・企画されました。

集会当日には、各小学校6年生や多古中全生徒、多古高生、地域住民の方々約650名が参加し、「多古町の未来」について、将来の夢やより良い町にするにはどうしたらいいかなど、小・中・高校生と社会人の代表13名の意見発表が行われました。その中から2名の方の概要を紹介します。



### 「多古町の未来のために」



多古中学校 2年 菅井 実南

多古町には、幼・小・中・高とすべてがそろっています。多古町で育った子どもたちが町にある学校へ進学していったらとてもいいなと思います。なぜなら、最近高校はほかの市や町に進学している人が増えているからです。高校までの間、勉強、部活に励み、将来の夢を多古町で見つけられたら素敵なことだと思います。

す。現在の多古高校は、部活にとても力が入っていて、多くの大会に出場している素晴らしい学校です。町の行事への参加もしていて、地域との交流もあり、とてもいいなと思います。

多古高校には、あいさつ等の礼儀や部活はもちろん、勉強もしっかりでき、仲間と協力できる高校になってほしいです。来年度受験生になりましたが、こういった高校になったらぜひ進学したいと思います。そのためには、高校に頼ってばかりではなく、より良い学校にするために、少しでも協力できることがあればいいと思います。

### 「多古高校と地域の連携について」



多古高等学校 生産流通科 3年 清水 麻衣

現在、私は農業に関する知識や技術を身につけるために勉強しています。これから多古町が活気あふれる町になるためにはどうすればよいか考えました。例えば、高校で行っている授業の内容の発表や地域交流の展示、地域のアピールを入れたビデオ作成。高校生が考えた町のPRを発表すると活気が出ると思います。

ジャムや梅干し、イモようかんなど学校産の農産物を原料として加工したのも町のイベントで販売できるようにし、私たちの勉強している成果をもっと地域の方に理解してもらえたらいいなと思っています。

私は多古高校の3年間で、地域との交流からたくさんのアドバイスを頂き、また小中学校との草花交流、ホテルへの食材提供などへ積極的に参加することで、コミュニケーション能力を高め、自信を持つことができました。これからは、私たち若い世代が中心となって地域を盛り上げて恩返ししていけたらいいなと思います。

### 集会を振り返って

実行委員長

並木 昭靖

この集会は、初めての企画でした。参加者のアンケートの中から、多くみられた意見をまとめてみると、「子供と大人が一緒に発表者の主張を聞く機会を設けたことは、意義ある集会であった」「地元多古高校の活性化、魅力ある学校づくりは速急に町を挙げて取り組んでほしい」「これからも多くの子供たちや町民から意見を聞く集会を企画してほしい」「子供たちや他町から嫁いだ親も、元多古高校校長の山崎先生の講話を聞き、多古町の教育の移り変わりや、多古高校の存続の大切さがわかり勉強になった」等々がありました。私たち大人は、子供たちが安心して教育が受けられる町づくりのサポートをどうしたらできるかが今後の課題となります。

この集会や広報の記事をきっかけに、友達や家族の間で、こんな多古町になったら、こんな高校になったら進学校したいなど、話し合う機会を持つてもらえればと思います。